須壽美所

下

中村進午文庫
文庫5
132
2 止

涼とくさといひて、かるものを人よ見
習侍るよ。うべんるげなるあとおもゝれ。
とてもあらバ。秋より冬さりて梅の
んだんいと寒めやかなるはしも。又いつ
ふも是ハ寒さむとありとはしりのみ
さぬをといつけてこれが次の書とせよ。
彼をとみこれをとよろそ。けよりとありく。
むかし疫ハなるべしとそのうし

早稲田大学圖書館藏書
所蔵 HK 中村進午文庫 番號 9271 小番 2
所属 HBS 部門 VII 番號 125
文庫5 132 2
法学部研究室より移管
中村進午氏寄贈

咲たる小野にて。尾花さるさぬの侍り
しこしを折りし出るまゝふくしえりぬ。
こハこゝる時雨も稀ぞや。唯にハつゝまま
けるらん池とぞ。

○葉月なかば甲斐の国にいきけるがすぐ
行つけかりしかバ。ひとへなる旅の衣のこ
していとさむき山高く谷深き国なれバ。
風の音も水のひゞきも異(コト)国にハ似ざ

ありけり。さて打ぬくるまに。昔ほども
来りぬ。武田信玄の大城の跡にして
あら玉る。げに此城の国に兵(ツハモノ)を伏(フサ)せ
て箭を作り馬を養しめしとぞ。
かく秋萩の花ちるほどに咲きて、うむとハ
おぼしてむや。虫のこゑみだれていとゞ
哀しく。空の行末も峰となるかなきさぬ
して日も暮るるに。袖もえりくに濡(ヌレ)て

ゆりみなりけり。は松嵐の音のみぞきこ
えしが。俄に寒くなりぬ。おどろきて
ゆきくもるに。家ハ富士の背向(ソカヒ)なれバ。
長月十あまりひと日といふに。雪ハ真白
ふりて。をちこちの高峯にも降れる。
○まさしくなれり越の西にくだる。近江
の国長濱といふ所を過ぎれバ。雪ハ三尺(ミサカ)
あまりて 濱風いと寒し。沖(オキ)のかた

といふ所に宿りぬ。こゝなる比花などけ
ハ。よれことを人に授(サヅ)け給ふとぞ。
示あきれ仏になむしやりける。是なん雪に
降こめられ羇旅ひて寺ともおぼされぞ。
詣ある人もなし。夕暮に来てをれバ
鶺鴒(サヽキ)といふ鳥の行あそびしかひつるに
や。堂のうち小鳥入れる。
○同し時湯尾峠を越るに。松檜(ヒノキ)ハ木垂(コタレ)に

こもれてまさはなはださむきば。雪のふかく
つもれるを谷風の吹のぼるに枝どもハ
ふきくだかれて。さとこぼれいとおもしろし。
○能登の国に松任といふ所あり。入江のおも
しろき様にていとおもしろき所なり。
さハ此橋にたちてみれバ海の魚どりの
おほくながれバ江をさしてのぼり来。赤(アカ)
目(メ)ハ唯黄金(コガネ)のひかりしかり。さゆりと

いふ所とハ水の色して清らかなりき。
よくみれハ眼(メ)の光る迄まちゐたりける。
平目ハおほく鮨(スキ)ハいとすくなし。此ハ美麻
中の二日ばかりをあゆみて宿從一里(ヒトサト)斗にて。
涌浦(ワクウラ)といふ湯泳(ユアミ)の所にいりたりしを
てみれば。此涌浦ハ世に稀なる温泉(イデユ)也。
海の中に鴨(カモ)なとの八十枚(トヒラ)斗も霞すみ
わたして。島のあるか中にいとく熱(アツ)さ

湯の涌出(イヅ)。それを汲て湯槽にたゝへし。
又汐みちくれども汐入て其中にいり居(ヰ)る。
いかなる病も癒るとて他国よりも詣来。
此島へきたるものハいとあまたにて遥
ばかりしくありしが。おのが自(ジ)師棹(サヲ)さし
くれし。又屋どりハ其磯なる海人の
家かりて朝夕のまかなひも打まかせつゝ居(ヲル)
なりがたく在るに離なきの風いとく

吹ておるる畑の黍稈ともハ打たふれ。
又其島ハ一和ぐるに。ある汐の底にまさき
きいりぬきしハかの湯槽ハ波にのりてそこ
そことゝもくだくといひありきぬ。
○松前の玉此守そろりぬすを送りなる
ひともきたりまいりにきさつき十日
何ありて六日よりまでかり出ぬるがあく
つされバ三坂(ミサカ)ときりにありて江戸

の大路なきどもりなる人ひとりもなし。
ことさらに風の心地して聊かひとり
しづけ日まふてざらめやとおもひて窓
をうちさしこもりて千ずまとふらまやと
り。道のべなどもたれバあそぶかくるとも
すや。おかくまそざりて窓を穿りて
ねくる。

○神無月は小春といふ此の名は此國には
いはぬ言ぞ。唐土には十月小春天氣好
とよみたりけれバ今ハ此ころはめづらしくて
ゑらいふめる。さるハ日さしのいとうらゝく
小倍なりとて鳴の巣とふ譯に
ゑきる人のかりやとるタつかたもくれの
夜かり出るまに。木の葉落まじりてさ
バしげるかと。花のおほくちれたるさて。
さへばる何をおもひつらんあらじ。

○かしおれ大酒言にてましけるがおくし
くり。立さたらひて入きたまへる。
惟頼してりとせたへるハ愛宕の山
まで逃しせて作りするよしの松之。
○ならちのかりとし侍りけるに。みハ
いと寒きまよ。煮てたうぬといふ。
るてさといへハ鱗にてあるりといふ。
こハおそろしといへバおのきひとり浦

鳥の子にてはりむとやおぼえとて
皆ふくむ。されも尋てで。今ハさぶらり
ふくさおのハと別て殿まうでよ候
雪をおすちひて冬へやらぬ。
○あしたよりふハ大根引ふことそれ。
朝霜のいてかりけるが。漸く消ゆき
あそて厩あたりのちろく跡をとりゆきつく
ゆきころるまむ。

○秩父郡に寄居といふ驛あり又荒川といふ
河を隔て西のかたに鉢形といふ山里
ありぞのかたハ神無月ばかりなれば
居てねるも夜もすがらいと寒く
そこをとほるにいとくたびれなして
唱ける夜又さらし守をおこせぞ。
いと寒げに袮むけまで出来。
○ある暑しいと涼しとて夕毎に

立出つる川のべハ古草枯たるにて秋
ハ清らにいと細くて流もあるにいと
おかしき鳥のおり居て石の上とうふ
てなりくや。
○祇園の森安井の林も木の葉ちりかり
落て峠ぬのあハゝハみるに袖まろびてなる
身と老女ガ纏けて体ちふ。
○吉ねの流のくハ氷凝ていとかそけしげ

るゝは何といふ人にやあらむ。ゆかしさ
ひとしほまさりてぞありしよろこびく
ミたり。
○春すぎてもとなりの入来。さらば
ちやもあけて日は暮ぬめりといひつ。ちか
かゝとおもひかゝるれとよくくすりぬ。
そこあけよとてひらけば雲きさ風の
吹いるに。夜八日もちかく雲くもあり

ぼといふぞ。物忘きいひてある人にあらむ。
○大かたの庭は。山をとおぼえる池などの広き
に。鴨の様の来なきて鳴。
新安寺の池の鴛鴦は見ぬ人ぞ多かり。
○道隆に下りて年ごとにえんなるまで踊り
かゝるすはこきさ。二月(キサラキ)すもるまきは。さまで
かは来夜の泊てかるに。丈(タケ)計ありたなた
ろ笛のうりへはかりあひて踏(フミ)どもおゆ

まにさる八沼も淵もこゝか○ば。峠いかに
ひかる沢くのこともなきを。馬かたのこや
しらかぜ○を挑かきて。猿の家ある
さりなくしかるよき時をとりて。大堀の猟
人里をりのゐるを。猿のまゝにみつこ
ろて。さて猿ハ雪の中に立ぬしおそれバ
家せあるかと。お猿ハ俄にかくろへて。西
東よりけ逃ぐり。おそれゐるあしもなきを逃

わくもされど。垣かあるを人立されバ猿に
ハらさひきて。だにやもくいけとりよそう
る。さて猿猟人にあひて。ものとかうしる
ぞ。猫もも似ぬ定けさるなり。
○道奥にありての猟をもとめつるあまた
角鷹を遣ひてこそせむやと云人のなきに。
猿かゝるなりゆきバ。やがてあとりもして
いさるる。二月ばかり雪のふかく凝するに。

脛(ハギ)にハ蒲にて作れる足沓し足にハ橇(セジキ)
といふ物をとりれてゞの雪の上を渉るなれ
皆其異国にハ何ありと見ぬものぞ。それハ飯(イヒ)
櫃(ヒツ)なるを桑の細枝(ホソエ)を押曲(オシマゲ)て作りたる物之。
是をとらければいと深き雪のうへをとりも。
平らけき地を踏るを傍きとよく訓ね
ば踏違へることもなくて行まてび
ありさまてるに軍のへよがの角鷹(クマタカ)を

もて鳴てのがるいふなおもしろさもおかしく
ハ日比なりしてゆきもバ千もなゆかれ。
といふささるハ比鷹ハ鳥搏(トリウツ)にかにおぞくて
唯兎瓶さなの物よありてハいとそしと
いり。又雪降国の兎ハ兎とるきバひさ
白くなりて雪のうへにハそれとしも分
らぬをば鷹ハとく見出しつねらき
もとまバんはつ放(ハナチ)きたるに落くるね

風の吹をよそにて免らハ耳とき奴
まで彼(カレ)が猶風をきくより。足をあらはれ
ずて動きもえせず。笹がくれびよりまで
くるときハ。いと安く捕(ト)らるゝなり。さる
をところに頭ハ。たかゝるゝされ。骨ハ押
おしきてぞ死居たり。猟しありく
に俄に雲かゝりて雷(コツキ)吹と梢の吹来る
そいと恙しきにハ。虚の庭かするが風

に添ひてあるく。息だもつきてあへぬ
ばかりぬる者ハ山路にかへて死とぞいふ。
○加賀の国大乗寺(タイジヤウジ)といふ寺あるにハ多の
僧の行つまり居て。禅(サトリ)をすることにぞ
さまぎれるの寺にかれておのきも
禅をふことをとるべきなむといへバいと
やすかきど。何をとへそこゝろひてや
ゆるしてけり世の常かくれともふなハ。

足桶(アシヲケ)なとに湯をくりして足あらハ
ゞ。火桶に火なとりてあくいふと。
是ハさるあさましき事もむね
び。皆のかりにかりさるをハとりておく
へきなりに所入事。水こそ足あらひ
く堂めなるなによりとるゝさてこれ
ハ猶とある人ハ壁(かべ)にむかひて袖を
かき合足ハいつけにくゝてもちなり。

あいふ人なれハ此方もおいそばせ(光)世の俗
じらひふかるまやハあらじ。
○夏蔭(ごり)此ハかのまれさぬまゝなる日も侍
るべくとくれのことおりて立出べう
をあらぬ日ありさる此しもかう
てうらにれてをときいとさびしく
もなくおるおとてハかうかぬの花
のなけの中にひとり立しるをまて

こうしぬ岸に黒木ハなくて松のこい
とつきなくえる。
きぬゝ萬井なくて黒茶なきりの梢の
うへに止りゐるに我のいなく鳴る。
○桃の木の葉ふ落果ていとさびしき梢
小啼乃しきく止りゐる寒のひゞろ
かろつときまなる。何にかあるむと
おりくる。

○かの小春さむるあつかけさに八怯。
みどりの花ありくるすゆりぞか中に蓑
むしすむ頭斗をさし出してあさる
さみるをを。餓にうきくりて食のふり
木きハかのおみかろきて見いりぬ。
○日ハいと短きをとれよがうちに十里(トサト)まり
の路ハゆかめとていでいとく路を立しつる
に三条の大橋を枝にかゝりてゆけバ。

さふる子とものいとうきれ衣着つゝ
かおきおきてくる。
○秋も七月が初旬よりと走へあはせ
むしそげ方彼方にかつげして。さて
またうらなくるに月のいと赤き。
○二月そうじめ長谷を立て京に帰るに。
生の松原を通るにに。風のむつよ
吹れに吹て菅笠を吹とられ

たび追ひてかはくるくの池に薩。付くる
男脛をまくりて入れば氷のまぜひえ
くとしる。
係生の末信社の国よりも上毛社のこ
くりハ花咲ちりて春のさいとまず
さかえふるに。坂本とふうまやよいされ
だちこち桜咲て山吹のもいろ
うく。見る程やうく京めるに。又るおむ

まつのん比を。さて碓氷（ウスヒ）の山を登り行（ユケ）ば
八山の桜さかりまてうくひすもなげ
に鳴とよむ。さてのぼりつきてこれハ。山の
いたゞきなる木ゝハまだ枯はれて。
木のめもはらざれば。雪ハこゝもとのそこに
おりて吹来る風いと寒し。

○豊（ヨ）のあかりきこしめれ。此庭のさまぞ
いと寒けるぞ中に湯（ユ）士（ジ）さらの笛（カリ）

まゐりさふハ。

○神無月はじめ。楫取（カトリ）の浦より舟に乗り
て鹿島（カシマ）のみやしろにまいり。夜のうちも通り侍り
しが。荒いくせをさりそびろこそも
まぢかりし。今ハ名のさわきいと広
て寒し。細き入江めく所に漕入ぬ。
そこハ浦尾さらる家もこの多か色
これ稲ともかりもして岸へふかする

捨くゑよおくけしを。又大根を縄
にあみてこもかけおくなり。
○朱雀門と羅城門との中程ハ今ハ田
になりてあり。さて京路はなほ
バげ道のあたりにハ水菜と云菜を多
く作りて作り。あたりきこえれバ漂る
さなまで京のいそぎおくなる。
○浪花よりのぼる舟ハ綱にして挽なり。

のりてのぼる時苫吹ならす風の音
のみなり。綱を挽ありきて音ぞ枕のもとに響
ていとも淋しきに。そが中に旅人のきた
るハいびきあらかにてかしかりき。さて此
あたりハいとこふかくしとへどもうるさ
くてかこともハこころにやすく目さめ
しける夜か。なみまししるかしておもふ。
今ハもや思ひうきてもあるべきがこころ

さかひやといへば。とりの方にうつりぬ
ときありて。今昨今漕出し舟には
ざきもあひはなどいふとよくしざされ
これバ。船中をさして照る日の影も。
雲よりまろくれ入りけむ。いとしくつき
よ川みなるのむきてなり。
○こゝをさてざり。西大寺にまします人の
ありてかりともしひけるがの気にうり

かけてとめ給へる柳は是にていと
若き木のうゑて侍るが。風のかたは
いたく吹きて。是待こそも侍らじ
ときこゆ。
出羽の国秋田の郡に。あきありておは
しける僧の。山寺に住て居あひしりが
りくゆきける。も月十日あまり二日。
まくしこそいつもはあきと定れ。

[seal]

雪みてもよく降こめたるこゝろりせむく
まへ磯をやとりて夕風夜さの宿の
ほとゝぎすしく小さげになりゆくを。
磯ては山のあさしむ。さてハは其の日。
ゆきくもりて雪降りけるが。やゝく白
きよりのうてふるやしよきるが中に峰
岩白にみむ降るきこえりて闇のまへなりつ
松を柏もうれしにふうりきになり。京

さきりハ日たる松ちるさぞかし雪の中に
こりせをとうむ。いとゝしきあかりに
ハ侍るよ。さりとて冬に春見えるをハ桃の
紅葉ぶ。めでたるしるしといふ木の上
小路きるハ。紅のきぬに花の綿おりかけ
よしもなるまで。咲所ハ侍りき。
脩覚寺といふ山ハ。院のころしの離宮に
て侍りし。さてこそ降りしつゞきて。

こまやかにゝえて候か。紅葉の高き紙
さねえつゝ流れきて思の侭さは
宮でうてふ、おりて候る。扇のころ
だんひとおりしろく結ふかり。神無
月すぎにえくきの夜いとく降来。な
とゝかれるが塩ぬきて。下る加茂
の社のこまへまてからうしで帰り
ま。さていふせむとてえこくをきば。

なかさ議りて。毛氈を引きりて机
かまかぐしとて。ちかうしで立ゆく
行うしはくぬ紅葉の風まつまそて飛
あるぐ衣はつくゐむしとおもしろき。
又そこへんある人の花れが。笠をむ
おほくめつせりとてごろつきと語と
そとりに。咲うしておこしのくり。
あつさけりの厩をとえれば。ぬるみじ

ゆふくらげに。烟のたちめぐる也。
○濱松の驛まで見えいさむとてい
そぐみ。縫き日みちバ著なみしれ。るみち
のりてたくれのいとほとむかひて
ゆけバやうしとやうて西の山際のまへ
こしあらくるすうるより夕日れのこと
さ生るるぐ。今もまゝりの垣ねまぎて
紅ゐるが。山茶花の咲てあまようろ子。

いつこふかありつても。
○武蔵下総のふさ西の中を流て。墨
田川のくま。古き塚の傍ら寺あり。其塚ハ
梅若とふ兒の跡なりとて。これ人
のいひつたへ。又其塚のうへに柳の傍らも。
こまかにつきて。みなと云。古きをいかう
なりて川のくまと見えたりハ。枯たる芦の葉
おひこれたる中に。白鳥とふ大鳥也。

深瀬てふとハ水底まさし入ゆく
あらむ
○底さし地といへど。今ハいづこともなし。
西の山際(きハ)ま青梅といふ里の名よ忘れ
る人多く作りて神無月のをしめは
行はてのくハ玉川とて大きくやう
なる川の流れながのさし路調布(テツクリ)と
まうれる所え。さらし出てこれハ岸の峰

いふくなりて流るゝ也。
○ち濱の湊ハ山のおくここそれバ峠池
なその名をなしてはしるくあふけて
人くあらひまて。えいるのいて寝きは
よろまバ苦なる葡のさてやうるるがお
ふく岩根小吹出るぞとこもとて
あふけて漕みんくるそけまあうして
ハ又なきなとなり。

○神無月のもじみん。高雄の紅葉みん
なればこゝハ又くらしの山を稱しに
ともかうるいろハ時しじ。槇の谷川より
さる岸根のりきちこてよりぞて峯
ふるもとつれの家ぬよ陸よりて飛むかき
出きハ松のいしく行うかしそるがの
うへ紅よくみとて。とよ君るけふひ
よるむ。これもりへきハえへれまあひて。

○きゝつれし紅葉ハ。風のみ空つれと
てぶ人ハ忘月なり。さらぶと涙うへき
時よみきバ浪花よりみまこしのりて。
隠岐の國の此方(コナタ)を。五十里浦より
海路をつゞりて。其間の闇よく。風
ハ東をよ吹かこりて止に。波ハうち
くへもてみまさらかさなりて。高くを
なそるし佇りき。おりひ出るまいと定

きんばく。

○中津の君のミちくに侍りて。此物語り
つたふるに松の実のなる時はミち
の中に庭をうづめけるがさハいへ
あさかりきとはいづきさりける
に根の上にいつく実なりきける。人
の跡のはるかさまよふきる。

○はつ夜に見るなる侍りて。神無月始め

にほひちゝて松こりけるに之生ける日
の国と云所にて。其のなる梅の名ぞ
に見えれバ。火をきて人にかかりあをむ也ぬ。
何ゆゑにかくとおりつるに。罪人の𛂞ゝくれ
よるが。ホあらためなるを守るべし。

○かくいましきここのついでにお
もひ出しけるの侍る。奈良にちとえ
峰ひとりなり侍るに。奈良山ちかく

なりて日もくれぬるに。雪いたく
ふり来佐保川のあたりにいたりて。米(ヨネ)
負ハせる馬どもの多く来るにぞ人に
立よりけり。さて。これバ稲もてる粮
のおちたるふきて侍るが。ふりかゝるな
ら坂より此者何くの罷によりて
と上條(クタリ)のこえたるふとよ。いとあや
しくて。いよ〳〵雪をうちきのけて

これバ此所にかゝへをうけたりといふ。
さてもおどろかれてあふきこゆるに。おの
がれの上に髪いとしろくおいたるに。
雪のおどろにかゝりかれたらめ。
これをみてまくるさまにてころ
なむ有ける。いと寒かりけんや。
箱根の山をこえゆくに。時雨のあめを
吹ちらふとて山風のいたくとよめ

るに湖の波もおさまれて。
〇それもこゝろとめてみれば。
こゝろもおりかえし人の心もゆ
なぞ唯足をとゞむなりけり。
〇神無月の祭りなれば能登の王なる一の宮
をおきて冨木(トギ)といふ濱へゆけば大き
なる磯(ヨリツ)のおほきさなりけるよ。波ハよど
と寄来礒ちかりのおほくもまれる

が寄(ヨス)るをバ磯の人小屋のあたりばば波
あるよ下りのそばそうけ人おひろふ。
〇奈良なる氷室の神社ハ鼓笛楽など
のことを頌えてまや。毎月海日とりふ
ふなれりの人多く集ひてぞ
ちやしてなるひさ常なきバ神の
人ハ来てこゝに紅葉のいとすく照り
なるけふうつろひてこゝあり。

婦ちらかすをもてるが、いとうしろまゝ
しが家ごとにおさなく書にぞあさ
うたをとおもしろうしもむとおぼゆ。
久しくあうさうひきうるう場を
のぞめのにきひより出来るぞいと
なほなるうれ。

誌足